

か、ああいうのも犯罪に結びつきやすいですから。それから、ねずみ講に引っかかったりとか、学生がよくやるのですけれども。数年前、うちの学生も引っかかったらしいですけど、市場調査という名目で、サラ金からお金を借りさせて、10万円払うんだそうですね。アルバイト料。これは市場調査だから、後でチャラになるから心配しなくていいと言って、サラ金から100万円借りさせて、そのままドロシちゃうという、それも全部携帯を通して……。学生に口をすっぱく、「うまい話には絶対乗っちゃいかん」と。私、きのう口座を一つ解約したんですが、3年間動かさないで、4、5万のお金、入っているのが20幾らです。びっくりしたんです。そういう低金利時代にうまい話というのは絶対どこかおかしいのだからと。ちょっと余談になりますが、そういうお話が聞けるのではないかと。

それに至る過程で、伊藤さんの方から幾つか候補を挙げて頂いたんですが、犯罪心理学の先生が皆さんお忙しくて、全然対応して頂けないので、その分野だけちょっと抜けてしまったのですけれども、すべてを網羅することは難しいので、もし犯罪心理学で頼める伝手をお持ちでしたら、奥田先生いかがですか。福島先生という上智大の先生、伊藤さんの方から聞いて電話したら、もう退任されて、裁判関係のこと以外は一切関わらないというふうに大学の方に言ってあって、電話番号も教えてもらえなかったですね。テレビに出るような方は、なかなかインタビューは難しいですから。裁判関係も結構お仕事があるんですね。

奥田 少年犯罪、年齢の問題の、教育という観点の第一人者。

伊藤 更生の方ですね。

奥田 そうですね。

谷 余談になりますが、昨日の判決はどう思われますか。母子殺人で、アパートに押し入って。

伊藤 山口の方ですね。

谷 無期懲役で、本人は7年たったら出てくると友達に手紙を書いたらしいんですけど、やはり死刑と無期懲役の間に、アメリカみたいに終身刑が必要なんですかね。罰則だけで犯罪が少なくなるとは思えませんが、やはりある程度の刑罰は必要ですよ。

伊藤 少年犯罪は、少年だけではないですけども、どうせ一人だったら無期にしかならないし、無期だったら、真面目にやっていたら8年位で出てこれるというのをわかってやる人が最近いますよね。

谷 少年法の年齢制限も知ってやっているというところがありますよね。

奥田 いなか社会の方がコミュニティ・レベルが殆ど無防備ですから。

谷 清永ガ先生と話していても、やっぱり監視が一番抑止力になるだろうと。勿論、防犯カメラなんていうのは、科学的にもあれなんですけれども、街全体を人の目が届くように…。

私は、神戸の殺人事件の時に、あの住宅地が映って、これは最悪の住宅地だと。みんな生垣とか塀で高くして、車庫のシャッターを開けて、車でサーッと出ていくような街なんですね。ああいう街だと、絶対犯罪は誰も見ていない。日中歩いていても誰にもすれ違わない。車しかすれ違わない。車というのはスピードがありますから、殆ど見ていないんですね。車ですれ違った人の顔なんて絶対覚えていないですから、そういう街を変えなければいけないという感じで、意気投合しちゃったんですけども。

伊藤 清永先生は元警察庁の科学警察研究所の研究員でもありまして、それを退任されて日本女子大の方でそういった防犯とか都市計画の関係をやっていらっしゃる。

谷 それで、実際に犯罪をした人を使って、アイカメラを付けさせて、自分が泥棒になった気分でやらしたりしたらしいんです。そうすると、狙った家を見た次は、後ろを見るんだそうです。入る時に見られるかどうか。必ずチェックするんだそうです。だから、見られないということが一番の彼らにとってのセキュリティなんですね。

東郷 住宅街の監視の問題が出てきたのは最近でしょう、歌舞伎町で監視カメラをつけたと聞きました。

谷 カメラですか。横浜元町が非常に…。歌舞伎町も始めたみたいですね。

東郷 歌舞伎町のエリアとしてつけました。

谷 ええ、この間したばかりなんです。

伊藤 元町は警察がやっているんじゃないんですね。商店街がやっている。歌舞伎町のは警察がやっているんです。

奥田 それでも、歌舞伎町へ事件の終わった後行ってみると、一体どこで起こったのかわからない。地元でも日常風景なんですね。事件になったからああいうふうな…。

谷 確かに我々もああいうところへ呑みに行くわけで、ここで火災が起こったら絶対死ぬなというところ

がいっぱいありますよね。逃げ場のない所とか、穴蔵みたいところ。

奥田 でも、そういうのがまたスリルがあるのですかね。渋谷やなんかで翌日焼肉屋なんかで同じように火災が起こってそれで、昨日の事件をみんな思い出して、一斉に外へ出て逃げたいいいけれど、お金を払わずただで出て儲けたとか、そんなような話がありまして、そういうスリルを味わってする場が多いわけですからね。

谷 店の側としては、そういう無銭飲食を防ぐ意味でも入口をふさいでいるわけですね。非常口なんかもふさいであって。

奥田 無銭飲食のためにふさぐとは…。都市計画で歌舞伎町全体を全部再開発してクリアランスしてしまえばいいんだなんて意見もありますね。ドラスティックに言えば…。私はそういうのはやりすぎかなと…。

谷 あそこがなくなれば、ほかに移るだけじゃないですか。

奥田 移るだけで拡散して、むしろあそこの中で完結した方がいいのかも。

谷 スラムクリアランスと一緒に、そこはなくなりますけど、外に外に広がっていただけですよ。

伊藤 私は歌舞伎町みたいところは、絶対に文明国として必要だと思います。ですからこの前、第1回目の時に都市のリスクというのが出ましたけれども、やはりああいうはけ口というのは絶対必要ですから、歌舞伎町は行ったら犯罪に巻き込まれるかも知れない覚悟を持ってあそこに行く。そういうのが嫌な人は、そういう所に近づかない。

谷 防弾チョッキを着て、酸素ボンベを持って… (笑い)。

伊藤 逆に、普通の子供が遊ぶ公園とか住宅地とか、そういう所で絶対起こさないけれども、歌舞伎町や渋谷のセンター街などは、そういうのがあるということを前提に覚悟して行きなさいと。

谷 清永先生も言っていましたね。一般の人が理不尽に犯罪に巻き込まれることを防げば、犯罪全部を防ぐということはできない。一般の人ができるだけ安全な状況をつくるのが社会の責務だとおっしゃっていました。

伊藤 選択と集中なんです。

谷 犯罪をコントロールすると言っていましたね。場所と時間と被害者を。

奥田 完全に安全な地域なんて、もうこれからの都市生活にはあり得ないですね。

谷 どこまでを受け入れるかという話ですね。

奥田 そういふようなことで多少被害を受けても、それはもう社会生活を楽しむコストという言い方があるけれども、あまりいいことではありませんが…。

谷 そういふ意見は比較的叩かれやすいんですね。だけど、やはり人間である以上、完璧なんてあり得ないことだから、犯罪も起きるし、事故も起きるし、災害も起きるという前提である程度生活を組み立てていく。ただし、それが余り理不尽に増え過ぎないように、一定のレベルの範囲内に納まるように。では、その一定のレベルって何かというのが一番問題ですよ。

そこで、我々がメディアに注目したのは、例えば外務省の問題なんてずっとやっていたわけですよ。みんな知らなかったですよ。知らなければ、全然被害意識も何にもないですよ。だけど、知ったらけしからんですよね、あんな税金を食いものにして。だから、犯罪も一緒に、報道しなければ知らないわけだから、そうすると危機感ってないと思いますね。

CNN か何かを見ていて、私はピンと来たんです。同時多発テロの後、飛行機が駄目になりましたね。乗らなくなりましたね。みんな何をしたかということ、かなりの長距離をレンタカーで、例えばニューヨークからフロリダ辺りをレンタカーで行くようになったんです。実際、どうだったかということ、その後飛行機の事故がゼロなんです。自動車の事故が急上昇したんです。どっちが危険かというのは、本当に逆なんです。報道によって意識を持ったことによって、かえって危険な方に行っているという例がありますね。その話は興味深かったです。

吉川 さっきの歌舞伎町の話に戻りますけれども、最近、ニューヨークのハーレムが物凄く良くなったというのをテレビでやっていたでしょう。あれは、ニューヨークというのはもともと犯罪が普通のレベルよりもひどすぎたから、ハーレムがほどほどになったということなんですかね。1時間位の番組をNHKでやっていたけれども、アポロ劇場の前で黒人が本当に元気に、「こんないい街になったよ」とテレビに答えているでしょう。あんなのは考えられないことで、ハーレムなんていうのは本当に怖くて、観光客が行くけれども、ニューヨークでこんな所に行ってきたよということの証みたいにしてバスツアーに乗った

ので、普通の人が一人で行ったら、まず車なんか置いておいたら車がなくなっちゃうとか、それはそんな古い話ではなくて、ニューヨークが全体として犯罪率が下がってきたというのはこの10年間だけど、ハーレムだけは、やっぱり行きたくないという所だったですよ。

伊藤 10年前まではそんな感じだったですよ、ジュリアーニさんが出る前は。

吉川 ハーレムがあんなふうになったというのは、本当に不思議ですね。歌舞伎町並みになったということなんですかね。

谷 よく調べてみなければわからないのだけでも、私はやはりジュリアーニの政策と、経済状態が良かったことと、それからジェントリフィケーションだと思います。経済状態がいいと、どうしても居住地とかビルが不足してきますから、どんどんいいエリアが広がってきますよね。そうすると、今まで悪かったところがだんだん限定化されて、しかもジュリアーニが非常に治安を重視しましたから、その効果ではないでしょうか。経済状態が悪いと絶対駄目ですよ。

吉川 それはそうですね。

谷 今の日本は最悪ですよ。

伊藤 それとやっぱり悪かったのは、ベトナム戦争の後、経済が疲弊した…。

谷 モラルがね。私がアメリカに行っていた頃が恐らく経済が最悪で、本当に大学の周りでも犯罪がしょっちゅう起こっていましたね。伊藤さんが行っていた頃は、キャンパスで殺人なんて聞かなかったでしょう。

伊藤 いや、しょっちゅうありました。

谷 まだありましたか。

伊藤 私が行っていた時も、まだこういうところでした。私の知り合いでも2人死にましたよ。二人とも韓国人でしたけど。同じクラスの間と、あと英語学校の同じクラスの間です。二人とも腕に覚えがあって、「金出せ」とやられた時に変な構えをしたらいいんですね。そうしたら撃たれちゃった。なまじ何か武道みたいなのがあると、向こうも怖いんですよ。

奥田 ちょうど今のハーレムが、ハーレムルネッサンス…、ある程度、以前のような危険というか、すばらしい場所では必ずしもなくなる。それはフィラデルフィアその他の同じような場所でも同じだと思うんですけど、フィラデルフィアも今はかなりインナーシティという、しかし、そこを調査したモノグラフィーみたいなものを翻訳をしている時にここで話したこともありますけれども、それは今までの要素、そういう地域の要素とは違うだけけれど、訳していても、とつてもついて行けないというのは、例えばそこで人々がどんなふうにご注意深く危機というものを事前に避けるかという、そういうノウハウなんですよ。

だから、特に黒人が気を使って気を使って、もうずっと白人と一緒に生活してきているわけだけれど、やはり黒人であるがゆえに避けられるわけです。ストリートやなんかに。みんな必死になって通りを渡ったりなんかする。そういうのを、「心配しないでいいですよ、私は決してあなたを襲うようなことはしませんよ」というような言い方をすると、それがむしろ過剰反応になって、白人からヒステリックなまでの攻撃にさいなまれる。そういう話がずっとあるんですね。

だから、都市の再生というような形で、そういうことが会話ができるようになった、ストリート上でも、そういうことは新しい動きではないでしょうか。

谷 アメリカの場合、肌の色が全く違いますからね、ハーレムの住民というのは。だから、それで完全に反応しちゃうというのはありますよね。例えば大学なんかは結構黒人が多いですから、普通に生活している分には、余り黒人という意識はしないですね。確かに白人居住区に黒人が一人いると、みんなじろじろ見ますよね。それから、警察がすぐ職務質問するらしいですね。私が行った時も色々問題になったこともあります。何もしていないのに3回も職務質問された。日本の場合はそれが多分アジア系外国人に当たるんでしょうね。アジア系外国人を見ると、何となく怖いという反応を示すのが増えています。

奥田 でも、外国人が一番怖いのは外国人なんです。

谷 私がいた時に、数字は記憶していないんですけども、黒人の若い人の死亡率と白人の若い人の死亡率は、数倍違いましたね。要するに、黒人でも裕福な人も勿論いるわけですが、大多数はやはり貧しい所に住んでいて、ドラッグだとかギャングの抗争とかで殺される確率が物凄く高いですね。

奥田 フィラデルフィアでも、10代、あるいは極端に言うと、まだ10代に入る前からドラッグ。それで、変なリーダーにつかまって、「ちょっと運べ」というような形で、お小遣いが桁違いですから、そこから

染まっていっちゃうという話ばかりですね。

伊藤 先生が訳された本の名前は何ですか。

奥田 それが「ストリートワイズ」と言うんですが。

伊藤 前にお話しされたものですね。

奥田 都会に生活する時の生活術と言うんですか、日本でやっちゃうと、都市共生の作法とか、そういうきれいな言葉で言うのだけど、ストリートワイズですね。そういうような知恵と言うか。

谷 サバイバルですね。

奥田 サバイバル術みたいなものですね。持たなければ都会生活に向かないのだという。

谷 最初留学した時に、大学からバサッと来たのは、インポートと書いてあって、何が書いてあるかという、犯罪に巻き込まれないための注意みたいなものが、2、3枚あったと思うのですが、物凄く細かく書いてありましたね。例えば、エレベーターに乗る時には、先に乗らないようにしろとか、先にボタンを押さないとか、そんなことまで書いてあるんです。通りを歩く時には、余り端っこの方を歩いて引きずり込まれるといけないから、適当に真ん中より車道寄りを歩きなさいとか、そんなことが書いてあるんですよ。

東郷 この頃日本だって、端を歩く時は、車道側を歩かないようにと。

谷 ひったくられるから？

東郷 そうです。海外並みになってきましたね。

谷 そうですね。

奥田 でも何か形が整ってきましたね。

谷 それで、メディアの分析の方はまだちょっと進んでいないのですが、一応、市民意識と専門家のインタビューの方ができ次第、皆さんの方にお送りしますので、執筆の時に参考にして頂いて、まだ目次がラフなので、もうちょっと詰めさせて頂いて、……するというのをまた別途お願いのお手紙をお送りします。

吉川 どういう体裁のものになるんですか。白書的なものですか。

谷 どういう感じのレポートですかね。

河野 50部は向こう様に持っていかないといけないわけですね。それは白い表紙に題名をつけて。

谷 普通に綴じていけばいいんですね。

河野 はい。その後を会員とか皆さんに配るためのちゃんと表紙をつけた、何かそういうものにしたいなと思っているんですけども、それを何部つくるかはあれですけども、最低1,000部位はつくらなければいけないというような気持ちではいますけれども。

吉川 300ページといたら、結構できるよね。

谷 原票を入れればね。だから、会員に配る方は原票の方は要らないですね。エッセンスの方だけで。

吉川 そうですね。

河野 でも、案外売れるかも知れないですよ。

谷 別冊にしますか。その方が処理しやすいですか。

伊藤 製本の時にですか。それは製本のやり方次第だと思いますけど。

谷 あと、目次案と分担のところですけども、こちらで勝手に入れましたが、複数名書いているところは、左側が主になって書いて、右側の方に材料を色々提供して頂くというつもりで書いています。

それから、6章に限っては、それぞれの項目をそれぞれ専門の立場から書いて頂くというような…。

恒松 僕は書けないな。安全な社会って考えたことがないものだから。最初、伊藤さんのところは伊藤さんがやって頂いて、私はとても駄目だな。

谷 何か思うことを書いて頂ければ、それをこちらでアレンジしますので。

恒松 いいえ、思っていることがないですからね。これを見て色々考えさせるのは考えさせられますが。

谷 何でも結構ですので、ひと月考えて頂ければ。

ページの割り振りも、まだ書いてみないと大きく変わる可能性もあるということで。

東郷 ページと字数の関係はどうなっていますか。

恒松 ページというのはどの位ですか。

谷 字数ですか。字数は大体こんな感じですね。A4で1枚…